



介護リスクマネジメントNEWS

外泊の送迎時に利用者が転倒し骨折した事例

比較的自立度が高い利用者への対応に油断はなかったか。

サービス種別 入所施設 トラクレ種別 骨折 発生場所 施設玄関付近
 介護状況 一人で待機中 本人の状態 右大腿骨亀裂骨折

ご利用者Aさんの状態

- Aさんは、事故当時81歳の男性で、要介護度は要介護1。
- 軽度の認知症で物忘れなどの症状はあるが、意思の疎通は可能。一人で歩行することができ、入浴時を除き、基本的な日常動作は介助を必要とせず自ら行うことができていた。
- Aさんは、月に2日ほど自宅に外泊することになっていた。

事故発生時の状況

- 事故当日、Aさんは外泊日となっていた。当日の送迎は、ケアスタッフである職員Bが一人で担当することになっており、通院予定の利用者Cさんも同乗することになっていた。
- Aさんは、自宅に向かうため、職員とともに荷物をまとめて排泄を済ませた。10時に職員Bに付き添われて自力で歩行し、施設玄関前に止められた送迎車に側面のドアから乗車した。職員Bは、Aさんに運転席のすぐ後の席に座ってもらい「シートベルトを締めてください」と声をかけたが、実際にAさんがシートベルトをしたかどうか確認はしなかった。
- その後、職員Bは車椅子を利用しているCさんを施設の玄関まで迎えに行き、送迎車まで連れてきた。車両後方で車椅子用のリフトを下ろし、Cさんの車椅子をリフトに固定して上昇させていたところ、「痛い」というAさんの声が聞こえ、送迎車から降車したAさんが地面に転倒しているのを確認した。
- 職員Bは、リフトの操作を途中でやめるわけにはいかず、操作を続けながら、大声で玄関にいた他の職員に急を告げた。職員Bの呼びかけで事態に気づいた職員は、急ぎAさんに駆け寄った。職員Bも少し遅れて駆け寄ったところ、Aさんが右太ももを押さえて痛みを訴えたため、施設の看護師と共に右足のつけ根や腰を確認したが、外傷、熱感、腫れなどの異常は確認できなかった。その後は痛みの訴えはなく、Aさんが自力で歩行が可能であったことから、医療機関での診察は不要と判断し自宅へ送ることにした。
- 職員Bは、Aさんの自宅に到着後「送迎時に自ら車を降りて転倒し右足の痛みを訴えたが、その後痛みの訴えはなく、外傷・腫れ・熱感等の異常はない」旨を家族に伝え、Aさん家族も了承した。
- 翌日になり、Aさんが再び右足の痛みを訴えたことから、救急車が呼ばれ、搬送先の病院で右大腿骨の亀裂骨折が判明した。

皆さんで考えてみましょう！

Q. **トラブル予防の観点から、何ができたでしょうか？**



外泊の送迎時に利用者が転倒し骨折した事例

比較的自立度が高い利用者への対応に油断はなかったか。

今回のトラクレ事例の対応から学べることを考えてみましょう！

この事例の対応のポイント

今回のトラクレ事例の対応のポイントを3つあげてみました。これ以外にも様々なポイントが考えられると思います。みなさんも意見を出し合ってみてください。

ポイント①：送迎時の安全管理の強化

- 車内にいるAさんが、突然送迎車から降りようとする可能性など、介護現場で起こりえるリスクが予想できていたか。
- 日常生活が比較的自立しているとはいえ、軽度の認知症があるAさんに対して、常に動向に注意を払い、安全確認ができていたか。
- 職員一人で複数のご利用者を順番に誘導する場合、一人のご利用者が確実に安全な状況にあることを確認するまで、次の作業に進まないルールを徹底していたか。
- 一人体制ではなく、職員2人での送迎体制を検討する必要はなかったか。

ポイント②：転倒時の対応マニュアルの見直し

- Aさんが転倒した場面を誰も見ておらず状況がわからないため、念のために外傷がなくても医療機関で診断を受けるという判断が必要ではなかったか。
- 痛みが軽減した場合でも、骨折など内部損傷が隠れている可能性が高いため、自己判断せずに医療専門家の意見を仰ぐ必要があったのではないか。

ポイント③：事故後の家族との連携

- 事故が起こった詳細な経緯と受診をしないという判断の理由をご家族が納得できるよう丁寧に説明できていたか。
- ご家族に対し、事故があった直後の注意点として、Aさんの身体状況を観察するためのポイントや緊急時の対応方法などを説明できていたか。

比較的自立度の高いご利用者に対しても油断せず、起こりえるリスクを予想し、安全を確認していくことが大切です。職員一人ひとりが事故防止に対する意識を高め、日々の業務に反映させていきましょう！



<情報提供元>

東京海上日動ベターライフサービス株式会社
ソリューション事業部

◆許可なく、転送・転載・複写はご遠慮願います。